



2019年4月1日

## ブラジルに見る世界経済の減速

公益財団法人 国際通貨研究所  
上席研究員 森川 央

昨年（2018年）のブラジルの実質成長率は2年連続で前年比1.1%という低い成長率にとどまった。その後も期待されている景気の加速は見られない。年明け1月の経済活動指数（月次GDPともいわれる指標）は、前月比-0.4%となった。前年比でみても0.9%増と、昨年8月の同2.3%増から徐々に鈍化してきている（図1）。

今後についても雲行きがあやしくなっている。ブラジルの主力輸出品である鉄鉱石を運ぶためのバラ積み船傭船料（ブラジル＝中国間）に変調の兆しがでている。傭船料は2016年から季節的な上下動を繰り返しながらも、下値が切り上がる右上がりのトレンドが続いていたが、足元では傭船料が下がり始めている（図2）。中国の景気減速の影響が、鉄鉱石需要に表れてきており、ブラジルへの波及も始まっていると考えられよう。

図1 経済活動指数



(資料) ブラジル中央銀行

図2 中国ブラジル間傭船料



(資料) Thomson Reuters

2017年以降、ブラジル経済は一次産品輸出の回復に助けられ不況を脱出したが、内需は依然として低迷している。ブラジル政府は年金制度改革<sup>1</sup>をはじめ経済構造改革を

<sup>1</sup> 年金制度改革については「年金制度改革に挑むボルソナロ政権」を参考にして頂きたい。  
[http://www.iima.or.jp/Docs/topics/2019/338\\_j.pdf](http://www.iima.or.jp/Docs/topics/2019/338_j.pdf)

推進し、企業の設備投資を促進し内需拡大に結びつけることを目指しているが、改革は短期的には国民に「痛み」を負担することになるので、国会での審議は難航が予想される。

そして、そうこうしている間に、景気悪化だけが進行してしまうというシナリオも考えられるのである。

以上

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しく願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。